残業　*Overtime at the Office by Sagasoga*

カナダのバンクーバーのオフィス。深夜にもかかわらず、ジョンは疲れと憤りに苛まれながら、ひとり仕事を続けていた。

面白くないことだらけだった。車は駐車禁止でレッカー移動されたあげく、婦人警官にこってり油を絞られ、恋人にはふられ、美人の女上司からは残業を命じられた。

世の中間違っている、とジョンは心の中でつぶやいた。女に権利を与えすぎなんだ。女なんてキッチンでおとなしくしてりゃいいんだ。女をキッチンから出して我が物顔でえばりくさらせるようになってから、世の中おかしくなったんだ。

そのとき、用具室で物音がした。ジョンはデスクを離れ、用具室のドアを開けた。

「誰か、いるの？」

「私よ、ジョン」

答えたのは、同僚の女性ローザだった。

「今日も残業なの？」

ローザが微笑んだ。ジョンは答えず、何してるんだ？　と訊ねた。

「財布を忘れちゃって取りにきたの。あ、そうだ、あなたの顔を見て思い出したんだけど」

「なんだい？」

「あなたは明日も残業よ」
「おい、冗談だろ！」
「ううん、本当よ。さっき、勤務表が出来て、リンダがサインしたの」
リンダは彼らの女上司だ。
「で、でも……。なんでぼくだけ……連ちゃんだぜ」
「あなた、普段から女性差別的な発言してるでしょ」
「え」
「先週、パーティで、女は男より劣ってるとか言ってたそうじゃない。リンダの耳に入っちゃったのかもよ」
「でも、それとこれとは無関係だよ」
「でも、いまの職場環境を考えたら、そういう発言は慎むべきじゃないかしら。それにあなたのポジションから言っても、私たちが決める勤務表に抗議はできないはずよ」

ジョンは怒り心頭に達した。
ガールフレンドにふられたのは、こいつらが決める勤務表のため連日の残業を強いられてきたからだ。
ローザはくるりと彼に背を向け、オフィスを出ようとしていた。

ローザは、肉感的な女性だった。タイトなスカートから、長いセクシーな脚が伸びていた。引き締まったウエストの下で、かたちのいい尻が揺れていた。ピンクのブラウスに包まれた豊かな乳房が、歩く度に大きく波打つのだ。
怒りのため、我を忘れたジョンは気づいていなかったが、彼のペニスは勃起していた。彼は、心理的には彼を追いつめる女どものシンボルとして、ローザに深い怒りを抱いていたが、肉体的には彼女の性的な魅力に興奮していた。それらが混ざり合って、この女を罰しなければならない、という激情が彼の脳裏を支配した。罰するだけではなく、肉体的に征服せねばならない。怖いもの知らずの女たちに、男の物理的な優越を思い知らさなくては、彼がいま置かれている馬鹿馬鹿しい状況を変えることはできないだろう。
ジョンは背後から、ローザに抱きついた。彼の勃起したペニスが、彼女の尻に押し付けられた。
ローザは悲鳴をあげた。同時に、右足を後ろにはねあげた。
踵のヒールが、ジョンの股間に打ち込まれた。
幸いというべきか、ヒールの先端は睾丸には当たらず、ジョンのペニスをかすった。
それだけでもジョンの性器に痛みを走らせるにはじゅうぶんだが、致命傷にはならなかった。むしろジョンの怒りの火に油をそそいだ。
けしからん女め！
こともあろうに、男の大事な場所を蹴り上げようとするなんて！

ジョンはローザを突き飛ばした。ローザは床に転がった。ジョンは彼女を仰向けにしてのしかかり、勃起したペニスを彼女の股間に押し付けた。ローザの呼吸が荒く乱れた。ジョンは彼女の唇に自分の唇を重ね、彼女の鮮やかなブロンドの髪に指を走らせた。

ふと、ジョンはローザの顔を見た。

唇がくすくすと笑いを漏らし、美しいブルーの瞳がまっすぐ彼を見上げていた。彼女は、自分からキスを返してきた。

彼女の左手が、ジョンの股間に伸びた。柔らかな掌が、ズボン越しに、はちきれそうな彼のペニスをつかみ、繊細に動き始めた。

素晴らしい快感がジョンを包み込んだ。彼はまさに天国にいた。このまま、彼女にしごかれつつ昇天しそうだった。

彼はこの時点で大きなミスをおかしていた。彼女の右手が、彼の股間に伸びていることに気づくべきだった。その右手が、ジョンの睾丸に触れた時点で、彼女の意図に気づくべきだったのだ。彼は不覚にも、その右手がさらなる快楽をもたらすはずだと勘違いした。

ローザはすさまじい力で、ジョンの睾丸を鷲掴みにし、ひねりあげた。

ジョンは小娘のように絶叫し、体をのけぞらせた。

ローザは痙攣するジョンを巧みにコントロールし、彼を仰向けに床に転がしてのしかかった。右手で睾丸をひねりあげ、左手でペニスを引きちぎろうとするかのように引っ張った。

「やめてくれえ！」

ジョンは叫んだ。ローザは大声で笑い、言った。

「いやよ。あんたのような女性差別主義者に、女の強さと、男の弱さを思い知らせるまでは、やめないわよ！」

「ぎゃあああ！！！！」

ジョンは激しい苦痛に身悶えた。

「やめてくれえ……わかった、わかったよ……君たちのほうが強い……ぐわあああああ！！！！」

「下手な嘘つくとためにならないわよ！」

ローザは、彼の性器から両手を離し、両足首をつかんで股間を広げさせた。それから靴を脱ぎ捨て、ズボンを突き破るばかりにふくらんでいる彼のペニスを、素足でもてあそびはじめた。

「あんたが本気でそう思っているかどうか、試してあげる」

ジョンのペニスは、再び快楽に包まれた。満タンになった精巣が、器官に溢れる白い液体をいまにも迸らせそうだった。

「男は、あらゆる点で、女に劣っている……そうでしょ？」

苦痛に引き続く快楽で恍惚となったジョンは、返事を怠った。

「ほら、やっぱり嘘つきね！」
ローザは、踵を思い切り睾丸に打ち込んだ。ジョンは女のように甲高い悲鳴を発した。ローザは彼を離すと、股間を両手で押さえ、床をのたうちまわり、子供のようにすすり泣いた。

「かわいそうな弱虫君ね」
ローザがあざけった。
「ここまで虐めるつもりはなかったけど、自業自得よ。どれ、立ってごらん」
ローザは、手をさしのべた。ジョンは恐れおののき、身を固くした。
「大丈夫、痛くしないから」
逆らうと、かえってひどい目にあいそうだった。ジョンは差し出された手をつかんだ。
ローザは、ジョンを引っ張り起こし、ダンスをするかのように、両手をつないだ。
「どう、歩ける？」
ジョンの膝はがくがくと震えていた。ローザは、子供をあやすように、ゆっくりと後ずさった。ジョンはおそるおそる、脚を踏み出した。
「そうそう、上手ねえ……いち、に、さん……その調子よ……ちゃんと歩けるじゃないの……」
ローザは微笑みを絶やさぬまま、いきなり膝をつきあげた。膝小僧が、ジョンの睾丸を二つとも押しつぶした。

ローザは、ジョンの股間を蹴り上げたままの姿勢で、数秒、動かなかった。
ジョンは雷に打たれたように、硬直した。眼球がいまにも飛び出しそうだった。
ローザがけたたましく哄笑した。

床にくずおれて痙攣するジョンを見おろしながら、ローザは携帯電話を取り出した。
「はぁい、リンダ。遅くにごめんなさいね。緊急事態なの。勤務表を至急変更しなければならなくなったのよ。そう、ジョン。彼、明日の残業は無理ね。なぜかって？　いまオフィスにいるの。彼、私をレイプしようとしたから、逆にやっつけてやったの。うん。そう、金玉を蹴り上げてやったわけ。一部始終は監視カメラに映ってるはずよ、後で一緒に見れば、わかるはずだわ……」
ジョンは、この世のものとは思われぬ痛みと苦しみと屈辱に気を失いそうになりながら、ローザの言葉を聞いていた。
もはや彼は、女上司にも、女同僚にも、逆らうことを揺るされず、奴隷のように従うしかないのだ。さもなければ彼を待っているのは、監獄行きなのだから。